

盆栽のモダニティ——「絵画的趣味」の受容とピクチャレスク

武井一毅（明治大学）

盆栽は小さな鉢の中で樹木の生育を制限し、ある程度の時間をかけて整枝することで山水樹石の景、美的な心象を表現する特殊な芸術である。この意味で盆栽が確立するのは明治三十年代、20世紀初頭のことである。盆栽とは近代の所産であり、その積極的意義として「盆栽のモダニティ」を問うのが本発表のねらいである。

盆栽誕生において美的規範は中国由来のものから「絵画的趣味」（金井紫雲『盆栽の研究』1914）へと移行した。本発表ではこの移行を「盆栽のモダニティ」の美学的側面の問題として位置付けた上で盆栽とピクチャレスク双方の美学を比較検討する。明治の盆栽家である木部米吉は、外国人紳士に盆栽の鑑賞法の説明をするため、油絵の風景画と並べて陳列したという（前掲書）。その際、盆栽の配置は画中の木と見かけ上同じ大きさになるように適当な位置が決められている。つまり「絵画的趣味」における盆栽はそれ自体の美しさのみならず、風景を構成する要素として一定の絵画的性格を有しているのである。本発表では盆栽と絵画の表象媒体の差異に注意しながら二つの要点に絞って比較検討する。

一つ目は物理的大きさと美的規範についての比較である。ギルピンは芸術家の視野の中では特定の形式に当てはめて風景を捉えなければならないと主張する。「自然」はそれ自体で調和しているが、芸術家の視野ではそれを把握できないからである。後期ピクチャレスクになると、ナイトやプライスが「放置」することで生まれる「野趣」に美的要素を見出すようになるが、盆栽において「放置」が積極的に許容されることはない。芸術家の視野よりも鉢の方が遥かに限定的であり、植物の生育活動が美的規範を短期間で崩してしまうからである。美的規範は表象媒体の物理的制約と密接に関わるものである。

二つ目はそれぞれの「想像力」についての比較である。ギルピンが主張する「想像力」は美的規範を補完する射程に留まるものであり、絵画に基づいた風景の理想化であると解釈できる。盆栽の「想像力」とは「自然」の中で定型化された樹形から「風景」のアレゴリーを読み取ることである。これら二つは「眼の教育」という共通の性格を有しているが、盆栽に要求される知的教養は自然科学に根差した「自然」の運動性の理解であり、ピクチャレスクにおいては芸術に精通した「画家の目」である。

ピクチャレスクは無定形の風景を分節化する行為である。盆栽が樹形を「観察」し、定型化する背景にはこの分節化するまなざしの働きが潜んでいる。その中で「自然」は見出され、盆栽特有の規範と「想像力」によって「絵画的趣味」がつけられた。規範と「想像力」はそれぞれ内側と外側に向かうエネルギーであり、盆栽の「小さな盆上に大きな姿を表現する」基本的姿勢はその緊張関係の現れである。「盆栽のモダニティ」は近代的な枠組みの中で発揮されたある種の独創性にあるといえる。